

猫蓑通信

第114号

特大号

令和三年
(2021年)
4月5日発行
(年4回発行)

爽楽庵路子さんをお送りして

島村暁巳

一月二十四日に、倉本路子さんが逝去されました。

三十年前に神楽坂連句会を創設されて、会員を慈母のように慈しみ育んで下さいました。路子さんには小生の連句事始めからご指導いただき、ほぼ三十年にわたるおつきあいでした。まさに「親切の国から親切を広めに来たひと」がピタリのお人柄で、会員一同は、母の膝元で遊ぶ幼児のようにのびのびと遊び戯れ、そして学びました。

会の運営も誠に新人にやさしく、数座の中の一つを「新人専用」として路子さんを中心に設け、育成を計られました。数回後にはもう一人前で一般の座で活躍できます。また、捌もほとんどしていただくのが特徴で、優れた育成システムです。

もう一つ、神楽坂連句会の特徴は毎年の新年会と忘年会です。ここでも路子さんは親切を發揮され趣向を凝らし会を盛り上げて下さいました。新年会では名物の大阪寿司と俳句クイズ

で配る賞品が好評で、大いに湧きました。また、忘年会ではコミカルな「おてもやん」、お色気とユーモア溢れる「めだかの学校」の踊りなどを演じてくださり、一同抱腹絶倒で座を盛り上げて下さいました。

路子さんの親切のもう一つはまめに資料を作り配布されたことです。猫蓑通信バックナンバーの明雅先生の解説や、最近の猫蓑通信にも掲載された「爽楽庵豆知識」などです。まさに親切の権化のような方でした。

小生が神楽坂連句会で連句を始め、路子さんを知ったのは、還暦を迎えた平成五年のことです。ある日突然、妻から「連句をやってみない？」と聞かれました。実はその数年前の名古屋出張の折、テレビ塔下のセントラルパークで、芭蕉の『冬の日』五歌仙の初めの一巻「狂句こがら



平成二十五年九月、神楽坂連句会二十周年祝賀会で挨拶。グラントヒル市ヶ谷にて。

●目次●

● 爽楽庵路子さんをお送りして	島村暁巳	1
● 馬を止めた話	倉本路子	2
● 夢まぼろし	倉本路子	2
● 北陸に於ける二村文入先生	杉本 聰	4
● 二村さんにゆかりの連句会	鈴木千恵子	6
● 第百五十四回例会		
令和二年芭蕉忌	歌仙 五巻	
● 第一回猫蓑会リモート	二十韻四巻	10
● 第百五十回例会		
令和元年猫蓑会総会	歌仙 七巻	
● 爽楽庵豆知識……………	①和装の伝統柄	15
第百四十八回例会		
平成三十一年初懐紙	歌仙 七巻	16
● 爽楽庵豆知識……………	②和装の伝統柄 続き	
● 事務局だより		20

しの」の記念碑に出会っていました。連句というものに深い興味が湧き、すぐ本屋で求めたのが東明雅先生の名著『連句入門』です。そのときから、機会があればチャレンジしたい、と思っていました。ですから即座に「やってもいいな」と答えました。

こうして俳句を通しての路子さんと妻の縁、芭蕉の「狂句こがらしの」の巻の石碑や明雅先生の『連句入門』との縁で、私は神楽坂連句会に加えていただくことになりました。この経緯と、当時の神楽坂連句会の楽しい様子については、その数ヶ月後、『猫蓑通信』第十四号に「とにまじりて雑魚のうきうき」という一文を書かせていただいています。

その楽しい会の中心に、いつも路子さんの笑

顔がありました。

路子さん亡き後の神楽坂連句会は、創立から会の諸事を支え続けて下さったご息女の佐々木有子さんを中心にますます発展してゆきます。猫蓑会の皆様どうぞ今後とも温かい目で見守って下さるようお願い申しあげます。

路子さんをお送りするにあたり、数ある佳句の中で特に私の大好きな二句を記します。

馬を止めた話

倉本路子 『雲云』No.49 令和二年夏号より転載

ずいぶん前のことだが、今は亡き田舎の妹が元気だった頃、その妹から電話があった。

「昨日村のあつまりのあつて、お姉さんお元気ですかと聞かれたんで、はい新宿で元気にしとりますと返事したとよ。すると『あの姉さんな何さま暴れ馬ば止めなはったとですけん』と話の弾んだつよ。」

「エエッ！」と私。

戦後数年の頃、世の中が動き始めて運搬手段の荷馬車ブームが広がりはじめた頃のある事である。その日私は独り、徒歩で田の草取りに向かっていた。少しばかりの農家が点在する誰も居ない農道を歩いていると、遙か向こうから大きな馬が馬車を引きずりながら砂煙を立てて駆けてくるのが見えた。

「危ない！ 轢かれたら死ぬ！」と、私は道

不思議やな胃の無き吾の秋渴 路子
次の世もをんなでゐたい菊枕 全

次の世で路子さんと一座できる日を楽しみに。心底懐かしい路子さんありがとうございました。温顔を偲びつつご冥福をお祈り致します。

合掌

路の左側へ慌ててよけた。馬の後方から大声で止めてくれーと叫びながら大慌てでやって来る男がいる。近づいて来た馬を見ると私のよけた方に手綱をひきずつている。その瞬間私は思わずその手綱を拾っていた。すると馬は荒い息を吐きながら止まったのである。馬は一キロ近く走ってきてくれたびれていたであろう。余りのことに興奮して言葉を失っていた私は、やっと追いついてきた男の人に、「おじさん、これ」とだけ言つて手綱を手渡した。おじさんは何度

夢まぼろし

倉本路子 『雲云』No.51 令和二年冬号より転載

二十歳より戦後七十五年の夏
影踏の影追ひゆけば月凍つる

私は大正十四年一月、熊本市にある母の実

も何度も深々頭をさげていたのを覚えている。その道は、あと五、六十メートルいけば、流藻川の土手になっていて、のりあげてしまうと、馬は馬車共々転げ落ちて、おじさんは財産と仕事の全てを失うところだったのである。

その当時、馬を止めるには馬の正面で大手を広げればよいというのは、皆の共通認識だったし、私もそれは知っていた。けれど突然の事だし、恐ろしくてとてもそんなことはできる筈もなかった。しかし、おじさんは私がそうやって馬を止めたと思いこみ、村へ帰ってから、暴れ馬を若い娘が両手を広げて止めてくれたと伝えたいらしい。その後、おじさんに会うことも全くなく、東京に転居した私には、その話が延々と何十年も村の中で語られていたとは知るよしもなかったのだ。

私も今年で九十五歳になり、あの頃の人たちは皆天国の住人になってしまった。あの農道は今や立派に舗装され、トラックや自家用車、耕運機が走っているようだ。

家で生まれた。有名な水前寺公園の近くである。すぐ横を流れるのは清らかな湧水だったが、ひよつとすると私の産湯はこの湧水だったかも知れないと思う。

母の実家は二階建て、中庭に大きな肉桂の木がそびえていた。その木の根を掘って囓ったりもしたものである。玄関を出ると、道路を隔てて、砂取小学校の校門が真向かいにあった。あ

れからやがて一世紀、市街化計画で母の実家も焼酎甕の転がっていた隣のアルコール工場も消え失せて、見事な市街となり、当時の影も形もない。

遠路の旅に耐える迄に育った私は、数え年の三歳の夏、北朝鮮の父の元へ行くことになった。平安北道江界邑の別河里という所である。その頃父は、北朝鮮の官有林を伐採し、河岸に運び、筏に組んで、河口近くの町の仲介業者に売り渡す仕事をしていた。

別河里は、満州国との国境を流れる大河鴨緑江を溯り、さらに支流の禿魯江を溯った先の国境の小さな村であった。

父は、その小さな村に家族を住まわせて、そこを足場に更に山奥で仕事をしていた。冬は零下三十度の酷寒の地である。

「昭和三年秋半ば」と歌われ、御大典式のあった年に、妹が生まれた。従って、妹の出生地は謄本で別河里となっている。私達は数年間はこの地にて暮した。

父の仕事が軌道に乗り、時流にも乗って収入が安定して来たので、母と子供達は、年に一度、夏休みは熊本に帰省して過ごした。満州名物のビーフンを柳行李に詰めておみやげに持ち帰ったものである。

胃の弱かった母は、大好きな金柵温泉に行くのを習慣としていた。金柵は宇土半島の終点、三角港からタクシーで五分ほどの所にある炭酸泉である。農閑期や夏休みなどをここで過す人もあり、胃の保養の人も多かった。

この温泉で胃を治すために来ていた、サイパン島の小学校の先生を思い出す。夏休みを利用して来ていたのである。

当時、南太平洋のマーシャル群島は日本の委任統治で、サイパン島、ヤップ島、テニアン島、パラオ島などあった。その小学校では日本語も教えていたらしい。今でも、日本の唱歌をうたえる土地の人がいる。

サイパン島の先生は子供の私にも面白い話をいろいろして下さった。サイパンは熱帯の島だが、時には卵大の雪が降るとか、島の若者に自転車で全力疾走させて、追ってくるスコールに追いつかれぬよう、負けぬよう競いあったとか。

温泉宿は、広い野原の中に一軒だけポツンと建つ白い二階建の家であった。一階は湯治客のための炊事場や脱衣場や風呂場などがあった。湯に入りにくるだけの村人も居て、歌ったり、踊ったり、飲んだり賑やかな湯治場であった。

「妙なところに毛が生えた 抜いても剃ってもまた生えた」という温泉で覚えた歌を、私は好い歌と信じて、母達の集りの席で得意になって歌って、おばちゃん達の大喝采を受けたことがある。あのような庶民的な宿での歌や話は、きつと卑猥なものが多かったのだろう。

宿の二階は、片側窓の長い廊下になっていて、仕切のある畳の部屋が並んでいた。宿のお姐さん達が、食事を運んだり、こまごまと世話をしてくれるのである。子供の私はお姐さん達と仲良しになり、一緒に遊んでもらったりしたものである。

そんなある朝、お姐さん方が廊下の隅に寄り集って大騒ぎをしている。何事かと寄っていつてみると、今朝急にみどりねえさんが居なくなって、置き手紙があったという。その手紙には「さいしある身に恋した罪で、宿を立つとき雨が降る」と、都々逸のような文句が書いてあったという。その後みどりさんは全く見かけなくなり、私が妻子という言葉を理解できたのはずっと後のことである。

アリランの国を離れたのは、終戦直前のことであった。

戦後数十年を経て、主人と妹夫婦と四人で、あのなつかしい金柵温泉に行ってみた。そこでアツと驚いたのは、なんと白い二階建の宿が無人の空き家となっていたのである。宿は私が思っていたよりずっと小さかったが、涙がこぼれて仕方なかった。庭先にあった、屋根つきの大井戸は今も変わらず炭酸水を湧かせていた。その炭酸水にカルピスを入れて飲ませてくれた優しかった母はもう居ない。

宿に毎朝八代海の魚を売りに来た漁師ももう姿がない。お八つがわりに食べたあのわたり蟹も今は高価になってしまった。不知火海のうたせ舟は、いまでも白帆を風にまかせて流している。

●以上二編のエッセイは、路子さんの連句の友でもある、俳誌『雲云』主宰、山本千代子様にご許可をいただき転載させていただきました。ありがとうございます。最晩年の二編、路子さんのお人柄を偲ぶよすがとしていただければと思います。

(編)



北陸に於ける二村文人先生 杉本聰

この拙文の題を決めるに当たって私は「文人さん」とすべきか「文人先生」とすべきか、あるいはもつと気取って「文人師」とでもしようかと、ずいぶん迷った。年齢からすれば私より一回り程お若く、巡り合わせが良ければ（あるいは悪ければ）私の生徒となって出鱈目の英語を習う羽目になったとしてもおかしくはない。

東京生まれで東京育ちの筈だが、お父上の勤務の都合で高校時代は金沢で過ごされたそうである。金沢大学を卒業し暫時金沢市内の高校で教鞭を執っていた私との接点がずれたのは幸運な偶然というべきかもしれない。ともあれ連句の道においては私の大先輩であることは紛れもない事実なので標題の通りとした。

不遜にも片時とは言え「文人さん」などと考えたのは偏に先生のお人柄による。連句の指導は懇切丁寧で、時には厳しく式目を躰けられましたが、連衆の絶え間ない雑談や、稚拙な表現に寛大で、穏やかに見守る姿勢を保っておられ

た。グループの一泊小旅行や全国各地の国文祭などにはたいいてい一緒に頂いて、公的なお立場があるにも拘らず私どもを土地々々の名店に案内していただき、時には二次会セットにさえお手を煩わせたこともあった。連句の上では指導者であってもそれ以外の場面ではあくまでも気の置けない仲間として接して頂いた。

平成三年に文人先生が富山大学に赴任する際、東明雅先生から「君が富大に居る間に北陸の地に連句を広めて来なさい」と特命を仰せつかった由、ご本人から聞いたことがある。平成二十六年六月に急逝される日までその任務は着実に果たされていた。

その間北陸では、平成四年の石川県津幡町、平成八年の富山県井波町、平成十七年の福井県越前市と、国民文化祭連句の祭典が相次いで開催され、それぞれの大会の準備段階から組織の立ち上げ、実施要項の立案、連句文芸の普及等に多大のごお力を注がれたはずである。

それぞれの地に植えられた連句の苗は今も息



長野県松代町で開催された「真田フォーラム2011」での講演「真田連句（百韻）の読み方」

づいている。いなみ連句の会、風狂連句会、武生連句の会等は、各種連句大会での入賞者を輩出している。

来富早々に先生を待つていたのは平成五年七月三日に予定されていた井波町開町六百年を記念する第一回全国連句井波大会の開催準備であった。それは平成八年に開催予定の国民文化祭のプレ大会に当たるものであった。俳句は盛んな土地柄ではあるが連句はしばらく馴染みが薄れていたところに舞い込んだこの大事業をこなすのは、決して容易なことではなかったであろう。俳句会の面々や教育委員会職員の有志等を集め、連句のイロハからの手ほどきに先生は熱心に当たられたそうである（その頃の私は連句には全く無縁であり、自分の住む町にそんな大会が催されていることすら知らなかった）。

この事業に備えて立ち上がった富山県連句協会の初代会長は志田延義（素風）という碩学であつたが、文人先生は副会長としてよく補佐しておられた。年に一度、瑞泉寺や黒髪庵で行われていた連句シンポジウムでは進行役を見事に務められていた。初めて私が参加した折に、その格調高くアカデミックな雰囲気強く惹き付けられたことを覚えている。

研究者としての文人さんの業績については門外漢である私が云々するのはおこがましいので控えるが、優れた指導者であられたことは、実際に教えを受けた身として確信をもって断言できる。

終戦直後に生意気盛りの中学生であつた私は

折しも世に問われた「俳句第二芸術論」を生嚙りして喜び、短詩型をとことん蔑視し、所謂新体詩を愛誦する文学少年となった。そんな私を今のような連句狂老人に変えてしまったのは紛れもなく文人先生の指導力の成せる業である。生徒を褒めることの上質な指導者であった。褒められる者を納得させ、喜ばせ、その気にさせる褒め方であった。

いつまでたっても確信が持てず手探りで案じた私の付け句をはじめ褒められたのは、次のような場面である。

発句 卒業子餞別にする七部集 文人
脇 若紫の匂ふ細道 聰

大学の卒業式の後、井波（富山市からは車で小一時間）の例会に馳せ参じて提示された発句に私は甚く触発された。恐らく岩波文庫の「七部集」であろう餞別を、教室を巣立ち行く学生ひとりひとりに手渡している美しい光景を私は紫草で飾りたいと思ったのである。付け味という概念を初めて実感した瞬間である。

「卒業式だからと言って振袖や袴を言わなかったのがいい。紫草の清楚な色香が発句をよくひき立てている」という講評が私をすっかり有頂天にした。

先生はまた出された句案を一直する際に、決して上から目線の押し付けではなく、あくまでも提案という形で示された。ある時私が苦し紛れに『麦秋や家苞にする湯饅頭』という稚拙な

発句を出したときに「（湯饅頭）が馴染みませんね。『家苞に温泉饅頭麦の秋』で如何ですか」と直され、私をして膝を打たせた。そのような例は枚挙に遑がない。

平成十年のこと、雄山閣発行の「series 俳句世界8」から依頼を受けられ、当時尾道へ今治間に開通したばかりの「しまなみ海道」に纏わる歌仙を捌かれた。それは次のように丈高く始まった。

歌仙「瀬戸の初日」の巻
瀬戸跨ぐ橋を初日に送らるる 志田素風
水尾引く船の太き輪飾 長谷豊子
末黒野を歩む人影何すらん 吉藤一郎

入門間もない私と私の友人三谷貴志夫君をその大切な一卷に連座させて下さったことも良き指導者の証である。

名残の裏の五句目に貴志夫君が詠んだ「こつそりと炬燵で読むは『失楽園』に私が『吹雪に冷えし裸身を抱く』と付けたところ『こんな句を詠むのは聰さんにおいて外にはない！』と叫びながら治定され、連衆は失笑した。お陰でしばらく私は仲間から「恋のサトシさん」と呼ばれるようになった。それである時「拙者仇名は恋の聡兵衛」という句を採って頂いて悪乗りし、「女房は小股の切れない女」と付けたところ、「都合が好過ぎます」と一言で退けられたことも忘れられない。上手に弟子をその気にさせ、窘めるべきところは厳しく窘められたの

2006年やまぐち国文祭参加の帰途鞆の浦にて、富山、福井の面々と。後列左から二人目が文人先生。



である。

これには後日談もある。この話を聞きつけた瀧澤尚子女史が次の発句を詠み、文音で歌仙を巻き、俵口に投じて大賞を得た。

発句 またの名を恋の聡兵衛懐手 尚子
脇 文は書きさし外は困 聰

それ以後しばらく「恋の聡兵衛」という名が独り歩きし、気恥ずかしいような、面映いような思いをしたことが懐かしい。

恋句と言えどこんなこともあった。平成十九年福岡国文祭で賞を得た半歌仙「奥能登や」の巻を捌いておられた時のことである。

（次ページへ）

発句 奥能登や音無く沈む冬銀河 正一
脇 浜の熾火で炙る寒鰯 聰

と、穏やかに始まった半歌仙が裏の三句目に「金婚の妻は薙刀師範にて」と来たのに私が「房事の前の作法厳か」と付けたところ、「どうしてこんなこと思いつくかなあ」と呆れながら採って下さったことも懐かしい。

平成二十一年七月に素風師の七回忌に寄せて巻いた半歌仙に先生の発句が残っている。

今更に開襟シャツの声やさし 文人
梅雨の晴れ間に集ふ川宿 恭子
道端に採れたての品並びあて 美友紀

二村さんにゆかりの連句会 鈴木千恵子

早いもので、昨年（令和二年）の六月で二村さんの七回忌を迎えた。

三回忌のときには、富山で猫蓑会・善光寺門前連句会・武生連句の会・いなみ連句の会・風狂連句会の合同連句会を行った。いずれの会も、二村さんが指導的立場で、またかけがえのない連衆として関わっていたものである。東京を離

この句会の後間もないころ、一人の心無き会員の暴言に深く傷つかれて会長職を辞された。痛恨の極みである。爾来富山の連句界がぎくしゃくとして纏まらないのは実に遺憾なことではあるが、しかし、先生がこの地に植えられた連句の苗はなんとしても育てたいと思うのは私だけではあるまい。

平成二十六年六月、突然の訃報は計り知れない衝撃を残した。本年（令和二年）はその七回忌。いなみ連句の会と風狂連句会が合同で二座に分かれ、追悼の二十韻を巻いた。その両座の発句だけを記してこの駄文を閉じるとしよう。

師の墓の在り処を知らず星月夜 正一
新涼や旧師の慈顔偲ぼる 聰

れるときに、明雅先生から「富山に行ったら、ぜひ連句を広めてくれるように」と言われ、種を蒔かれた土地は北陸を越えて信越に及んでいた。

今回は長女の合澤珠子さんもお迎えして、九月二十日、東京（深川芭蕉記念館）での開催であった。地域も人数も限らずに、二村さんの学識と人柄を慕う人の集まる場にしたいと考えていた。けれども、地方から上京がしづらく、さらに密を避けなくてはならない状況で、小規模な会になってしまったのは残念だった。合同連句会ではなく、ゆかりの連句会となったわけである。



「善光寺表参道ギャラリーウィーク 2013」でのトークイベント
「落語ってこんなに面白い〜深くて楽しい落語への招待」

当日献杯の後、一人ずつエピソードを語った。大学に赴任の当時、富山でお迎えになった武井雅子さん。獅子門の道統の大野鶴士さんが、二村さんの信州大学での先輩だったのが縁の本屋良子さん。近世文学研究者のご主人の縁で知り合った木越秀葉さん。ネットの掲示板でこ一座していた棚町未悠さん。たくさんさんの雑談をしたという人（歌舞伎・落語・講談など）、国民文化祭で親切にしてもらったという人……思い出は尽きなかった。若い世代の山中たけをさんは、どの連句の座に顔を出してもお名前を聞く、と語った。

わたしの心の中にも思い出がいっぱいで、何

を選ぶか迷った。結局、その日のお菓子のゼリー
彩果の宝石についてお話した。彩果の宝石は百
貨店では三越限定扱いだった。富山に三越はな
いそうである。というわけで以前にこのお菓子
をお送りしたことがある。奥さまの智恵子さん
はベリー系がお好きだということで、ベリー詰
合せを何度かお送りした。出来合いの詰合せで
ある。けれども二村さんの頭の中では、わたし
が店頭で「これとこれを詰めてください」と言っ
ているイメージが強いらしく、「千恵子さんが
そんなにベリーだけ拾っちゃったら、他の人の
分がなくなっちゃうんじゃないかなあ」と再三
言われた。その「なくなっちゃうんじゃないか
なあ」という口調がたまらなく懐かしい。

事務局が用意したお菓子はその他に、うさぎ
やのどら焼き・富山の白エビ煎餅である。珠子
さん（智恵子さん）は銀座ウエストのリーフパ
イを持ってきてくださった。奥野美友紀さんの
富山アンファミーユの焼き菓子の差し入れ。水
上潤子さんの福井の銘酒の差し入れ。橘文子さ
んの銀座松崎煎餅の差し入れ。お好きだったの
で……と言って、美味しいものが山のように並
んでいるのも七回忌に相応しかった。本屋さん
はこういう会ときのいつものように手作りの
袋物を持ってきてくださった。作品の話もしよ
う。雪の座・月の座の発句。

咄家の長き話やちつち蟬
二千里に張り扇鳴るや月の友

青木秀樹
平林香織

そして、花の座の第三まで。

濃竜胆藍は天より今もなほ

昼月伴にそぞろ行く道

地芝居の科白朗々諳んじて

武井雅子
合澤珠子
鈴木千恵子

他の場でも書いたことがあるけれども、国民
文化祭・とくしま2012の交流会のアトラク
ションで、二村さんは白浪五人男の南郷力丸を
務められた。

二村さんが亡くなって三年後、初孫の律ちや
んが誕生した。律ちゃんの見ることのできるお
じいちゃんの動画は、南郷力丸のものだけだそ
うである。おじいちゃんはいつか、律ちゃんと
連句を巻きたかったのではないかと思った。



国民文化祭とくしま 2012 交流会での「白浪五人男」演技を終えての退場。
左端が南郷力丸役の二村文人さん。

花の座

二十韻「濃竜胆」

武井雅子 捌

濃竜胆藍は天より今もなほ

雅子

昼月伴にそぞろ行く道

珠子

地芝居の科白朗々諳んじて

千恵子

机の上にちびた鉛筆

たけを

ウ 校庭にドッジボールの砂煙

珠

好きな子は誰とても気になり

雅

占ひを言ひ訳にして手を撫でる

を

昭和歌謡はムード満点

千

飲め飲めと誘ふか赤い冬灯

了斎

聖燭祭の弥撒に与る

雅

ナオ 腕振るふ日曜大工鉦がけ

珠

A4サイズ棚に入らず

千

リストラのリスト常連ばかり部下

斎

恋女房は家にどつしり

雅

旅先の空闇に射す夏の月

を

雨の止み間に蟬時雨聴く

珠

ナウケチャップとウインナだけのナポリタン

千

うららに続く皆のあひづち

を

手拭を捻つて振れば花の降る

斎

はつつあんくまさん子猫三匹

執筆

連衆 合澤珠子 鈴木千恵子 山中たけを

鈴木了斎

令和二年九月二十日 首尾
於 江東区芭蕉記念館

第百五十四回猫養会例会作品
令和二年芭蕉忌 歌仙154

関口の座

歌仙「ドライバナナ」 鈴木了斎 捌

翁忌のドライバナナの軽^{かる}さかな 了斎

ふはりと肩に触るる綿虫 美奈子

砂場から子等の元気な声のして 霞

蛇口きちんと閉めて帰らう 全然

月光に大樹いよいよ抜きん出る ひろみ

蔵の瓦の冷えて黒々 霞

ウ 菊人形突然妻に似て見えた 奈

お寺の嫁はちよつと受け唇 み

用もないのにやつて来る御用聞 然

セキュリティーには穴があるもの み

干されつつ砂に愚痴言ふ地曳綱 奈

回し飲みしてすぐに三升 全

父と子の契りを背なの刺青に み

満期出所を迎へ白南風 然

月浴びて祭笛吹く山車の上 霞

文句言はぬと決めたじやんけん み

物忘れ外来に花降りやまず 然

傘に音なき春雨の道 霞

ナオ 暮れかぬる国境の地へ潜入し み

面妖な字が紙にびつしり 然

麵^すバスタ蚯^み蛎^み蛎^す蛎^み蛇^な蛇^め蚯^く蛇^ち蚯^へ蛎^び蛇^げ蚯^ち蛎^ち

陶の枕に昼寝三昧 奈

来年で司法試験は十回目 霞

然

盤上白と黒が乱舞す

あれもこれもみんな夢なの放つといて 斎

ガラスの靴に合はぬわが足 霞

ガーターに挟み込んだるデリンジャー 斎

死ぬほど好きと言つて死なせる 全

遠くから汽笛の届く三日の月 奈

掠が塙へ帰る頃ほひ 霞

ナウ よく出来た案山子へおいと声をかけ み

木の実の落つる音数へつつ 斎

バイエルをとどこほりなく終へ笑顔 然

ドーベルマンの仔犬じやれつく み

いきなりにあちらこちらの花の雲 斎

ほんのり霞む苑の四阿 み

ウ 連衆 鈴木美奈子 高塚霞 小原全然

江津ひろみ

泊船の座

歌仙「草鞋の緒」

三木俊子 捌

草鞋の緒足袋に喰ひ込む時雨かな 俊子

悴んで差す宿の番傘 孝子

大鰯並べて糶にかけるらん 忠史

キロをポンドにすぐに換算 有子

テイクオフセスナの翼にかかる月 肇

俄かに立てる穂芒の波 孝

待ち合はす万妖祭の猫南瓜 有

すれ違ひざま忘れえぬ人 肇

満面の笑みのこぼれる当たりくじ 忠

噂を聞けば増える親戚

スウィングの合間に決める次期首相

月下美人は月の無い夜に

歩哨立つ砂の蠍に銃を向け

土産に買ひしホータンの玉

さとう菓子抓む粗目をこぼしつつ

訪問介護自転車で来る

父愛でし花の盛りの今年また

高々揚る百畳の風

ナオ 漫画家のペンに飛び立つ雀の子

歴史博士の男児雄弁

極楽は波の底にもあるらしく

自粛生活酒ばかり吞む

夕暮れに働きに出る世話女房

飾り窓にはともる角灯

柔肌の刺青に這はす蛇の舌

空蟬よりも軽いわたくし

噴き出してマグマはやがて山となり

G A F Aに勝てる勢力はなし

男等の踊りの指が月を斬る

新蕎麦の味汁はつげずに

ナウ 伝説を語るまたぎにそぞろ寒

玩具のやうな孫を胡坐に

ビリケンは通天閣の守り神

大リーガーの夢を追ひかけ

肩組んで寮歌放吟花の宴

毛刈り終つて跳ねる綿羊

連衆 坂本孝子 根津忠史 佐々木有子

宇田川肇

肇

無名の座

歌仙「初時雨」

佐藤徹心 捌

初時雨小筆ほしげな翁像

徹心

冬芽はしかと命はぐくむ

千恵子

駅ナカで土産スウィーツ買ったして

美智子

人混みをぬひ歩く盛り場

秀樹

月昇り愚直に変はる信号機

千

案山子の目鼻書かぬ習はし

心

ウ 温め酒少し熱いと言ふ親爺

樹

鯛のかぶと煮皿をはみだす

智

スキップの理由は上手に塗れた爪

心

フエンスから見る野球部の彼

千

運命の扉を開く甘い曲

智

もめ事ばかり続き金婚

樹

檀尻を軒端の月と楽しみぬ

心

辻の真中に夏草履落ち

千

ギンザとは地名ばかりが残りたる

樹

画廊を巡る偽の批評家

智

鳥になり大樹の花の枝に寝て

心

放哉忌にはひとり佇む

千

ナオ 胎動をかすかに聞きて畑鋤く

智

駐機場には飛べぬ飛行機

樹

妖しげに一反木綿ひるがへり

千

電気ブランに足はヨレヨレ

心

境内に突如出現中村座

樹

消毒液をさつとふりかけ

智

相談に選ぶ相手が本命で

心

マフラーよけて迫る口づけ

千

雪女郎ささやきかける夢の中

智

新幹線の向かふ新潟

樹

粧ひて常より大き里の山

千

間引菜だけのおひたしの月

樹

ナウ 戸惑へば腕の溢蚊がすさま

心

からくり人形ワルツ踊れる

智

広場からアコーデオンの音響く

心

宝くじ売る笑顔評判

千

野仏のねむり覚まさん花ふぶき

智

いつのまにやら鐘かすむ宵

樹

連衆 鈴木千恵子 聖成美智子 青木秀樹

幻住の座

歌仙「時雨忌や」

岩崎あき子 捌

時雨忌や穂のあるものは風を呼び あき子

老舗酒蔵杜氏来る頃 敦子

英会話テレビに向ひしやべりゐて 酔山

ティーベアーがウインクをする 魚彦

残業の疲れを癒す望の月 鑑

じつくり磨く落鮎の竿 山

紅葉散る岩を男が攀ぢ登り 鑑

待つも久しき青春の森 彦

手を取つて空路をパリへ出奔す 敦

ピアノせつなく愛の讃歌を あ

見え隠れ付度尽くす係長 敦

居留守を使ふ町の清掃 山

すててこに月を仰いで物干し場

彦

蝦蟇の顔した幽霊の出づ

鑑

きみまろの笑ひの涙毒舌に

あ

一旦停止左みて右

敦

耐へに耐へ共に復興とげる花

山

母の草餅按配がよく

彦

ナオ 清明に初孫抱き宮参り

鑑

褒めて育む夢は弁護士

あ

Pay Payのポイント貯めるお買物

敦

知らんぷりして猫は横向く

山

門付が選んで歩む冬日差し

彦

金婚式に贈る納豆

鑑

あの世までひたと匿せる浮気癖

あ

隣のパパに似た児生まれて

鑑

すらすらとじゅげむじゅげむを最後迄

山

荒れたる庵を竹が貫き

彦

月耿と孤高の獅子を包む檻

敦

珈琲の香がさそふ新涼

あ

ナウ ばい廻し爺の蒔蓄しつこいよ

敦

自転車つらねテニスコートへ

山

同胞に友の消息知らされる

彦

不良仲間が画家に大成

鑑

花筏組まれて解けてまた結ぶ

あ

うららの浜に探す貝殻

執筆

連衆 武井敦子 吉田酔山 御園魚彦

荒木 鑑

令和二年十月二十一日 首尾
於 江東区芭蕉記念館

Zoom

芥河の座

二十韻「飛行船」

功刀太郎 捌

春風に身をまかせ来る飛行船
 いよよ捻れのゆるむ萬作 太郎
 こぼれたる雛のあられを集めぬて 了齋
 バカラグラスでそつと乾杯 尚子
 イブニングドレスの肩にくちづけを 禎子
 褥の裾に月の影差し 齋
 人もなく障子立てたる俳諧寺 太
 饅頭をすする音の大きく 禎
 想定外離島勤務を命じられ 尚
 待つてましたと習ふサーフィン 太
 ナオ お祭りの薄荷パイプをすうすと 齋
 肩車して遠く見た山 尚
 どかどかとでえだらばつち大股に 禎
 虫のすだきに独り飯食ふ 齋
 見上ぐれば雲まに消ゆる望の月 太
 露に濡れたる指を触れあひ 蝸舎
 ナウ さよならを言ふならそつちからにして 尚
 なに余念なく鴉畑掘る 禎
 あけて花ゆふされば花ふけて花 太
 レタスを洗ふ水のなめらか 齋
 尚

連衆 鈴木了齋 宮川尚子 竹中禎子
 岩田蝸舎

Zoom

Zoom

筒井筒の座

二十韻「春の潮」

近藤純子 捌

春の潮そつと満ちくる離宮かな 純子
 鶯餅に添へるお濃茶 壘
 猫の子を撫でくすぐれば甘えきて 未悠
 靴の中に画帳クレヨン 酔山
 月照らす島でキャンプの兄弟 壘
 芭蕉布まとふ女将ひとこと 純
 片肌の白さで思ふまま落とし 山
 バンジージャンプやみつきになる 悠
 屋上に樹々のおふるる昼休 純
 健康診断結果良いてふ 悠
 ナオ 鯨鍋ネギも豆腐も酒も足し 壘
 里神楽へと誘ふ看板 悠
 初彼と親に内緒でふたり旅 山
 とても爽やか君の横顔 純
 円き月出れば九回裏となる 壘
 芸術祭に友の入選 悠
 ナウ 逍遙は税の並ぶ蔵の町 悠
 和柄小財布お土産に買ひ 悠
 摩崖仏ほほゑんでゐる花の雲 悠
 児等駆け回るうらかな午後 山
 あき子

連衆 棚町未悠 吉田酔山 竹中壘
 岩崎あき子

Zoom

初冠の座

二十韻「寒もどり」

鈴木千恵子 捌

寒もどり護岸工事のシヨベルカー 敦子
 海猫渡る島の夕暮 全然
 新社員上司二人に連れられて 美友紀
 皆の好みのコーヒーを知る 千恵子
 ヘッドホン電子ピアノで弾くシヨパン 紀
 夏の館に仮装する月 敦
 だまされたふりをしてゐる桜桃忌 紀
 芸者風情に心ひとすぢ 然
 激写するマニアの集ふ線路沿ひ 敦
 立ち入り禁止札が傾き 然
 ナオ 虎落笛廃棄物処理進まずに 全
 冬山登山列の肅々 敦
 積年の外反母趾が痛み出し 聰
 主治医に渡す部屋の合鍵 然
 満月に願をかけたる玉の輿 紀
 目黒雅叙園色変へぬ松 然
 ナウ ふるさとの新酒新米取り寄せて 紀
 慰問に向かう選手一行 然
 城跡に上る歓声花篝 暁巳
 たかくたかくとふらここを漕ぐ 執筆

連衆 武井敦子 小原全然 奥野美友紀
 杉本聰 島村暁巳



第百五十回猫養会例会作品
令和元年猫養総会 歌仙1〜4

草取の座

歌仙「ナリまやん」

鈴木了斎 捌

芭蕉庵溽暑の門の古りまさる

了斎

隣の軒にひやむぎの旗

鄭和

若き旅鈍行列車乗り継ぎて

美代子

ペーパーバックにはさむ絵葉書

待雪

月光に未来都市めくビルの群

節子

絶滅危惧の虫を飼ふ人

雪

萩咲けど一向色気づきもせず

斎

錦ヶ浦で突如心中

和

戦後史の真実いまだ闇のなか

代

コンビーフ缶くるくると開け

雪

どさくさにまぎれ隣のチョコを喰ふ

斎

輪廻転生その前は熊

節

風疼く月は天山山脈に

雪

雪女郎へと写メールを打ち

和

百年の孤独しみじみ酔ひつづれ

雪

汽笛の音が遠くから来る

節

メーテルの瞳に映り消える花

和

貌鳥とふは何鳥と問ふ

雪

ナオ 面妖な社員研修暮れかぬる

節

無理に笑って続くスキップ

代

猫カフェの猫に売れつ子売れない子

雪

祖父の教へは早寝早起

代

主計畑闊ふことを避けてきた

和

夜は女の言ひなりになる

斎

馬乗りの背ナに二本の汗の道

節

羽衣まとひ帰る天人

雪

風花が富士の高嶺を越えてゆき

和

青墨使ひ月の襖絵

全

鑑真と同じ波音聞いてゐる

雪

ごくごくと飲めラムネサイダー

代

ナウ 洗濯物干す人包む夏日影

節

民芸家具の無垢材の椅子

雪

クリムトの接吻せめて複製を

和

音譜に起こす鶯の声

代

はなびらの遁走曲のいつまでも

斎

誰もぬなくて揺るるふらここ

雪

連衆 高山鄭和 山田美代子 松島待雪

長坂節子

瓜番の座

歌仙「昭和より」

鈴木美奈子 捌

昭和より俳に遊びて蟬時雨

美奈子

句をひねりつつ冷酒一杯

あや

上げ潮の船足速く寄せてきて

蕉肝

書斎の壁に世界地図貼る

正夫

仰ぎ見る月皓々と濡れ縁に

遊眠

残暑続くと予報士の弁

や

道祖神ここより信濃走り蕎麦

眠

名所廻るもふたりならでは

肝

ペンツ買ふこれが決め手でゴールイン

夫

ナウ 季が癒した父の勘当

肝

着ぶくれて用意万端月の旅

や

冬の銀河はダイヤサファイヤ

眠

幻だ税務署が出す還付金

肝

選挙に負けて窮状に立つ

夫

自分史は失敗ばかり書けば売れ

や

百円ショップで買った消しゴム

全

イグノーベル花の下にて待つ知らせ

夫

窓際族が急な出替

肝

ナオ 酌み交わす昏れてむらさき春炬燵

奈

三十周年祝ふ撰集

肝

ノラといふ名をつけし猫はば利かす

眠

軍事演習ロシア中国

夫

何故かしら爺が出てくるごみ屋敷

や

やはり燃せない汗の恋文

眠

甘露かんろ君のほくろをちよつとなめ

や

クレオパトラとキスをした夢

肝

思ふほど金の力は動かない

や

ふはりふはふは狐火の列

全

雲上の峠を越ゆる月の道

肝

団栗拾ふ村のわらんべ

夫

ナウ ハンセン病収容所跡鶉鳴く

肝

自分で開けたジーンズの穴

や

駅ごとに違ふ旋律聞えきて

眠

体育館にて吊輪練習

夫

寝太郎が欠伸してゐる花筵

奈

田んぼをわたる風のうららか

眠

連衆 中林あや 近藤蕉肝 國司正夫

内田遊眠

雨乞の座

歌仙「花氷」

西田一枝 捌

花氷融けて今生透きとほる

一枝

飛び立つ気配鉢の鷺草

良子

田舎道コンクリートを打設して

肇

ツアー計画プランAB

泉子

丸窓に見知らぬ人と月を待つ

通齊

舞茸あてに地酒注ぎ合ふ

俊子

鼻眼鏡時代祭の雑司役

俊

上乘せのあるアルバイト料

良

声かける相手はいつも隅の彼

齊

喧嘩尽きぬが仲良き証

良

愛人の噂で議席失つて

俊

とどのつまりは大団円です

泉

正教の鐘楼尖る冬の月

肇

志秘め渡る凍港

全

「空いてます？」しはがれ声が降つてくる

泉

ペイペイ使う日常決済

齊

山桜西行庵の鎮もれり

良

霾る午後の犬の涙目

齊

ナオ 競漕の順位気になる元選手

泉

独身寮にてギター奏でる

良

小休止アルハンブラの中庭に

全

眼裏よぎる桃色の象

肇

有閑の婦人のあだな白重

良

令和元年七月二十五日 首尾
於 江東区芭蕉記念館

避暑地の恋が変へる少年

肇

芝剥いで野菜植系たり終戦後

俊

感染症のデータ買ひ取る

肇

匂ひ無き真空容器用意して

俊

やつと間に合ふ閉門の刻

良

三日月でシーソーすると幼言ふ

齊

鈴虫の声満つる四阿

全

ナウ 早稲実る産土神に頭垂れ

俊

運転免許返納するとか

良

老いてなほ挑戦するてふチョモランマ

齊

測量隊が据ゑた原点

肇

遠景に釣り人見ゆる花の下

泉

野点の席に舞へる蝶々

齊

連衆 本屋良子 宇田川肇 青木泉子

菅原通齊 三木俊子

水番の座

歌仙「夏旺ん」

高塚霞 捌

大川の波よ光よ夏旺ん

霞

ゆつたり進む納涼の舟

有子

国会は女性議員の数増えて

秀樹

馬場の調教師かるやか

あき子

月中天駅前壁面照らしをり

路子

短冊に書く七夕の夢

有

ウ 稲の虫訛も真似て虫送

路

寄つてくるものみんな受入れ

樹

初恋はあの十歳の保健室

有

見つめられればキュンとなる胸

あ

決勝戦白鉢巻の縦結び

路

交番勤務夜は安酒

樹

車寄せ格天井の冬さるる

あ

半月齧り雪女ゆく

樹

クエスチオン頑固と気骨どう違ふ

有

聞えぬふりも耳がピクピク

霞

飛花落花老いの軽みの僧仙厓

あ

この世のことはすべて陽炎

有

ナオ 六十兆細胞抱き青き踏む

あ

ステイプ・ジョブス我ら導く

有

日本の列車運行秒単位

あ

柱時計の振りゆつくり

路

山村の昔を語る写真展

樹

お天道様に両手合せて

有

郵便で人形送る夕祓

路

朝顔市でイケメンに遇ふ

あ

スマッシュの速さで決めたプロポーズ

路

年子年子の子ども八人

あ

遠回りするが近道月皓皓

有

秋刀魚の煙路地の奥から

霞

ナウ 昭和生き令和迎へる爽やかに

路

捻挫せぬやう避ける石段

樹

盲導犬びたりと止る交差点

あ

機械も時に暴走をする

有

したたかに酔うて候花庭

霞

春の帽子の羽根飾りゆれ

あ

連衆 佐々木有子 青木秀樹 岩崎あき子

倉本路子

第百五十回猫養会例会作品
令和元年猫養総会 歌仙5〜7

藍搗の座

歌仙「浅草や」

平林香織 捌

浅草や青酸漿の裏通り

香織

冷やかしてゆく縞の甚平

健

晩学の二部で新語を覚え来て

淳子

珈琲タイムライン交換

香里

望の月兎あるかと子に問はれ

恵子

こほろぎの鳴く隅の蹲踞

淳

SLの窓にかがしの次々と

健

出会ひのためにメイク入念

里

あの人の理屈つばいとこそそこが好き

淳

円周率を自慢する癖

吉文

年賀状チワワ抱へる写真あり

里

凍つる平原低き新月

淳

包の中歓迎の酒回し飲み

恵

噂千里と走り越境

淳

誰が彫るや面差し深き磨崖仏

健

願ひ叶へと宝くじ買ふ

吉

海に散る花に表裏のなきものを

健

鯉五郎追ふ板舟の影

吉

ナオ 春の暮習練をつむ空手道

全

「美の祭典」を名画座で観る

淳

「地上の星」中島みゆきダムに立つ

吉

いきなり転ぶハイヒールの娘

里

自然にも人にも優しい布靴

吉

向う三軒打水をする

恵

夕顔の棚越しに聞く晩御飯

健

女連れ出し何某の院

織

閨の内のぞき盗撮気を付けよ

淳

北の主席は太る一方

吉

月咄々パウンドケーキお手製で

里

鬼の子揺るる街路樹の下

恵

ナウ 帰農してすぐ地芝居の主役取り

淳

ダリに憧れ奇作傑作

健

一橋大学前の丸ポスト

吉

記念切手に行列の出来

恵

花盛り錦の衣夢に舞ふ

織

空へ空へとシャボン玉飛ぶ

里

連衆 由井 健 上月 淳子 式田 香里

渡辺 恵子 永田 吉文

虫送の座

歌仙「梅雨明の雷」

鈴木英雄 捌

大川に梅雨明の雷翁と聞く

英雄

詩心の湧く万緑の陰

千恵子

箸袋兜の形に折りこみて

転石

調理室から匂ひ漂ふ

未悠

月の光ゲ動物園の檻の黙

敦子

笹竜胆をそつと切りとり

英

ウ ハロウインのトリックを練る子どもたち

千

海図の一部いまだ空白

石

同窓会気になる人は欠席で

悠

誕生祝指輪したたむ

敦

脱ぎすてた下着ベッドの脇に散り

英

暖炉の薪の燃えて幸せ

千

月凍り兵士は向かふ北の国

石

会社社長の職を投げうち

悠

発掘の土篩つてるボランティア

敦

世界遺産に町は困惑

英

廃線の鉄路にかかる花吹雪

千

暮春の宿にひとり夢千代

石

ナオ 青鰻の懐しの味祖母偲ぶ

悠

ペイペイペイとキャッシュレス来る

敦

福助の月額剃つた頭頂部

千

いつでも客は神様のやう

石

ベテランが浴衣で歌ふ演歌ショー

千

蟻地獄となる追つかけの日々

敦

あの人がきつと魔が差したんでせう

石

教授にぞつこん父によく似て

悠

くまモンがいろんなとこで笑つてる

全

災害復興募る寄付金

敦

山裾の五百羅漢を巡る月

悠

あす自首すると黄落を踏む

石

ナウ ティファニーのショーウインドウ秋麗

千

オープンカフェでクロワッサンを

敦

絶妙な距離で近づく雀たち

千

せがれと酒を呑むやうになり

石

天空の城みはるかす花の雲

英

しやばんの飛んでドローンも飛ぶ

千

連衆 鈴木千恵子 林 転石 棚町 未悠

武井 敦子

曝涼の座
歌仙「川床や」

近藤純子 捌

川床やたゆたふ藻にも時代あり

純子

鮎群をなし向ふ上流

酔山

幼子と明日の行く先さがしみて

佐紀子

温泉ごとに違ふ効能

美智子

下駄の音追ひかけ昇る居待月

徹心

ゴーヤの棚のもとでおしやべり

心

支持政党決まらぬままにうそ寒く

孝子

十八歳は夢でいつぱい

孝

イミテーション姉の指輪をちよつと借り

智

銀座舞台に道ならぬ恋

山

駈落ちの男泣き泣き家を継ぐ

智

こたつはいつも猫独り占め

佐

有明のラガーと目指すW杯

孝

記念の写真飾る学長

智

会見で下げる頭は最敬礼

心

御所の引越すこし遅れる

孝

山寺の叢を包む花爛漫

山

春の絵日傘女坂ゆき

佐

ナオ 愛用の万年筆に恋おぼろ

孝

嘘が半分現半分

心

思ひたち荷を軽くしてひとり旅

智

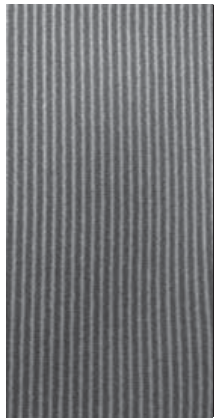
名言残し課長去り行く

山

白玉をまとめて作る海の家

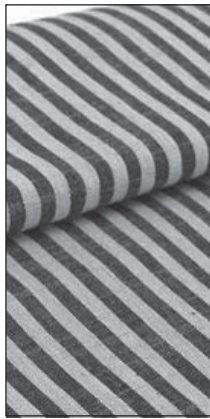
智

令和元年七月二十五日 首尾
於 江東区芭蕉記念館



千筋

非常に細かい縞柄。地と縞の二色により、遠目には中間の微妙な色合を表現できる。



棒縞

縞柄の基本の、太い棒状の縦縞。地と縞がほぼ同じ幅になるように織られる。

爽楽庵豆知識……………① 和装の伝統柄

かなぶんひよいと止まるワイパー

オスプレイに負けじと踊れカチャーシー

年金貯めて墓を建てたり

運命と言ひ訳をして帯を解く

触るる胸乳に走る稲妻

生涯の君を想へば後の月

案山子が少し泣きさうになり

ナウ 悪戯鬼の盗みて食へる柿渋く

すぐ解けるはず塾の宿題

商店街ナイロンたわしおまけにし

歩きスマホはやめて下さい

花片のときを飾る母の髪

香りほのかに暮れかぬるころ

執筆

連衆 吉田酔山 間佐紀子 聖成美智子

佐藤徹心 坂本孝子

山

孝

山

心

孝

智

心

孝

智

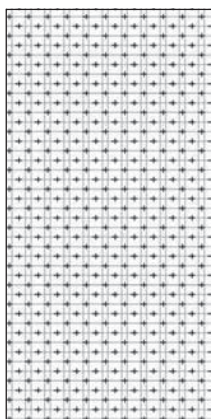
佐

心

純

筆

故・爽楽庵路子宗匠は、神楽坂連句会にて様々な参考資料のプリントを「豆知識」として参加者に配布しておられました。これもその一つ。



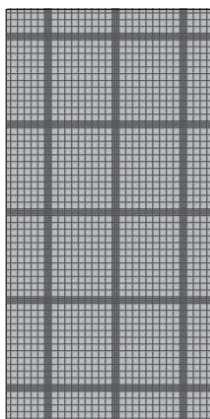
蚊紬

小さな十字紋の規則的な集積と格子とが、あたかも蚊柱と蚊帳の目のように見える。



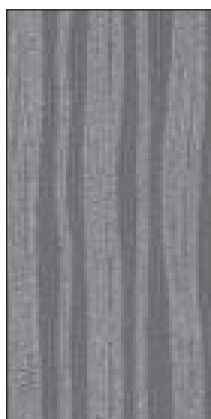
矢紬

時代劇に登場する武家腰元の着物には定番の柄。図と地が逆転を続けるゲシュタルト。



味噌漉縞

細い線による味噌漉のような細かい格子と、太い線による大きい格子を重ねたもの。



よろけ縞

フランス発祥で明治後期に流行とも、江戸期からあるとも。諸説あり。女性的な雰囲気。



子持大名

太い大名縞の傍らに細かい縞を子持ちになる。いわゆる子持ち野が並ぶ縞。粋な雰囲気。

第百四十八回猫養会例会作品
平成三十一年初懷紙 歌仙154

せりの座

歌仙「晴着の帯」

上月淳子 捌

初懷紙晴着の帯を直し合ひ

淳子

鏡開きに揚がる歓声

美奈子

坂道をクロスバイクで駆け抜けて

豊美

キーホルダーに干支の根付を

富子

外濠に月の光の遊びをり

奈

夜学の予鈴遅刻するなよ

淳

歌舞伎絵図菊人形師腕自慢

富

玉姫稲荷恋の願掛け

豊

ノクターン教授と弟子に火花散る

未悠

何処吹く風と草に寝ころぶ

淳

人事異動やつと望みの部署に付け

奈

神田祭の月の明けし

豊

御旅所を用意する間の試し酒

富

オスプレイ見る窓の高みに

悠

からうじて日米協定守られて

淳

茶房の隅に煙の輪を吹き

奈

空也最中ひるどきの贅花の縁

富

置薬来るミモザ咲く頃

豊

ナオ 弥生野にブーメラン飛ばす仲間達

悠

秘密基地には光る石置き

奈

遠き日の夢に宇宙の星の海

淳

鯉場すたれふところ手の爺

豊

切炬燵二人暮しも幾年か

富

歳の差婚で続くメロメロ

悠

赤リユックに水筒おむつ筒井筒

淳

厄落しとて髭を落しに

奈

鰻屋の誘ひの煙香ばしき

豊

心地よき風ビル街の駅

富

弦月は未だ斜めに取れさうに

悠

厨のちちろ甲に飛びつく

淳

ナウ 穢土浮上紅く燃えたつ曼珠沙華

奈

金堂落慶供養盛大

豊

眠たげに嬰兒泣く声かそけくも

富

高熱が出たインフル貰った

悠

花の雲百万石の天守閣

淳

春と去りゆく平成の御世

悠

連衆 鈴木美奈子 高橋豊美 名古屋富子

棚町未悠

なづなの座

歌仙「歩むかな」

内田遊眠 捌

この道を恵方と信じ歩むかな

遊眠

電子マップに頼る初旅

孝子

もてなしに白魚入りの飯炊きて

功

広間の縁に鶯のこゑ

美智子

残月に野球部集ふ春の芝

孝

筋肉量は並の上々

眠

ウ 文庫本ハンドバッグに二冊入れ

智

名探偵はをんな車掌で

功

あみだ籤引いて迷宮潜り込み

眠

家柄故に切り捨てる ami

孝

海を越え山越え恋と言ふものは

功

龍笛遙か聴きし十六夜

智

金包み容るる僧衣のうそ寒く

孝

宅配便で届くどぶろく

眠

垣根越し噂の好きなコミュニティ

智

保育所建設みんな賛成

功

仰ぎ見て御代の来しかた花惜しむ

眠

羅陵王舞ふ面麗ら

孝

ナオ 娘が巣立ち大掃除する四畳半

功

庭師ひよつこり土産小脇に

智

早口の通訳が要る国訛り

孝

亡者の声か下北の風

眠

武者人形飾りてをれば泣きし吾子

智

ラムネの玉をころころとさせ

功

国憂ふ後を絶たない改竄に

眠

雪が全ての穢れ消すてふ

智

恥づかしき処も触れて睦み合ひ

功

とろりと甘き夢の数々

孝

姥捨の月が掘り出す山の襷

全

遠く見送る雁金の列

眠

ナウ 禰宜の詠む祝詞に紅葉急ぎつつ

孝

高齢化する古き町並み

功

シグナルは私の為に点滅し

眠

夜間飛行のキャプテンの指呼

孝

賑やかに花の大樹に人溢れ

功

伏目がちなる牧の若駒

智

連衆 坂本孝子 松本功 聖成美智子

こぎやうの座
歌仙「シャンパンの泡」 大島洋子 捌

シャンパンの泡シユワシユワと初明り 洋子
ぴんと張りたる伊勢海老の髭 良子
猫の恋見知らぬ顔の交じりあて 鄭和
オセロゲームの勝負のどちらか 通齊
冴え返る剣道場に月の影 あき子
少年たちはあすを目指して 良
靴にはSF小説二三冊 全
B級グルメ長き列なし あ
不昧公さても呑気な面もあり 和
十八番の技で恋の駆け引き 斉
そぞろ寒口マンス詐欺に掛かる我 良
心とろける霧のロンドン 洋
織月に寄せては返す波の音 良
漁師老いたり潮喰れの声 あ
政界の引退記念回顧録 斉
ばら撒く癖が今も直らず 洋
甲板に人の薙めく花見舟 斉
予言通りに吹くは軟東風 洋
ナオ 義士祭線香たむけ泉岳寺 斉
新駅名は慣れぬカタカナ 和
AIにドローン宅配バンクレス あ
砂かけ婆三伏に入る 良
帰らうか帰したくない時鳥 あ

平成三十一年一月二十六日 首尾
於 アルカディア市ヶ谷

エキセントリック年上の女
合鍵が知恵の輪のことからまりて
遂に廃業決めた鋳掛屋 洋
鬼は外幼児凜と立ち向かふ あ
デニムのズボンつんつるてんに 全
ヨセミテを果てなく照らす望の月 和
獺の始めに銃磨き上げ 斉
ナウ 色々の薬飲み分けさやかなる 良
ゴスペル聴けば気持おだやか あ
贋作のミケランジェロにのせられて 和
朝な夕なに励む体操 良
仙境に物識り立ての花大樹 洋
麓の町は陽炎の中 斉

連衆 本屋良子 高山鄭和 菅原通齊
岩崎あき子

はこべらの座
歌仙「縫初や」 松島待雪 捌

縫初や友禪裂のくくり猿 待雪
赤白黄色揺れる繭玉 忠史
公園のテニスラリーの軽やかに 幸子
下校のチャイム夕靄に聞く 雪
月昇る文字の薄れし文学碑 史
曲がりくねって芒野の道 幸
ことのほか酔のまわった新走 雪
ウ 婚約指輪片膝をつき 史
二人して行ってみようか船の旅 幸

ひょうたん島にドン・ガバチョ殿
マドンナと言われはりきり立候補 史
保育園児の日焼対策 幸
有明の蟬は総身の殻を脱ぎ 雪
こんな場面で無理なタツクル 史
和服着てエスカレーターエレベーター 幸
可憐な声で経を読む尼 雪
右左千鳥ヶ淵の花筏 史
お玉杓子の手足次々 幸
ナオ 春の野辺歩け歩けの列長く 幸
共通テスト託す民間 史
英会話とつさの役に立ちません 雪
乗換案内孫に全任 幸
白内障八目鰻の届けられ 史
おかまいなぐと雪女郎消え 雪
追うほどに遠ざかりゆく寅の恋 幸
私の彼は億の年俸 史
別荘はこやかしの景勝地 雪
しかと連結こまちはやぶさ 史
みちのくの田毎の月に遇ひ得たり 幸
葡萄の房を受くる掌 雪
ナウ うれしげに門くぐり来るハロウィーン 史
ドラゴンボール潜むガチャポン 幸
極上の孤独に烏龍茶の香り 雪
杖も持たずに青き踏む命 史
花枝垂れ分くれれば峯も尾根も花 幸
翅を休めに蝶が来る島 執筆

連衆 根津忠史 飯島幸子
(新仮名表記)

すずしろの座
歌仙「外濠の」

國司正夫 捌

外濠の流れゆつたり春近し

ふくら雀の遊ぶ公園

クラヴサン調律少し整へて

微分積分すらすらと解く

車夫仰ぐ高層階に三日の月

金木犀の香る路地裏

思ひ出のまた蘇る秋裕

丸き鏡に紅をさす指

文左衛門吉原太夫買切りに

もう効かないの恋のブレーキ

原つばの帰化植物を引つこぬく

米朝中のはまる泥沼

月涼し人皆深く眠る頃

白装束で富士詣する

七か国語堪能にして国捨てて

スキットルには安いバーボン

花の昼に魔女が届ける宅急便

鉛筆削るうらかな縁

ナオめかり時ひいぢい様の虫眼鏡

マッサージ椅子埃かぶれる

なおみちゃん話すかたことよろこばれ

規則無視して飛ばす高速

うつかりとスマホ落とせば運が向く

乃 枝 健 乃 枝 織 乃 織 乃 織 枝 乃 織 健 織 枝 乃 織 健 乃 織 冬 乃 香 織 正 夫 一 枝

寒声聞こゆ南無阿弥陀仏

選挙戦うぐひす嬢の着ぶくれて

武器一本を秘めて結ぶ髪

政略の婚でありしがほださるる

まんぢゆう恐い志ん生の芸

銭湯の煙突わたる今日の月

後楽園に瓜坊を見る

ナウ万鬼祭鬼はほんとは気弱にて

DJポリスアイドルとなり

シャーロックホームズ行きつ戻りつし

賞を獲る気で綴る自分史

応援の一糸乱れず花の下

黄蝶白蝶それぞれの夢

連衆 西田一枝 百武冬乃 平林香織

由井 健

健 夫 乃 織 乃 枝 全 織 健 枝 乃 織 健

夾染庵豆知識.....② 和装の伝統柄 続き



牡丹唐草

牡丹と唐草を組み合わせた模様はすべて牡丹唐草と呼ばれる。着物に限らず陶器にも。



朽木形

朽ちた木肌や板目を模したもの。絵巻物に描かれた平安朝の几帳の文様にも見られる。

和の伝統文様には、同じ名称でも技術者の創意に基づく様々なバリエーションがあります。ここに示したのはそれぞれの一例です。



花の丸

いろいろな花をそれぞれ一つの円形にまとめて散らしたもの。江戸時代初期に流行した。



観世水

能楽観世流の家元が使う文様。流水紋でもより自由に変化するものは「光琳水」と呼ぶ。



毘沙門亀甲

六角形の単純な集積をベースに、様々なバリエーションを作れる。これはその一つ。



亀甲

六角形の集積による、亀の甲羅に似たパターン。亀は万年、目出度い文様とされる。



花筏

桜以外にも四季のさまざまな花が描かれる。筏が描かれる場合もある。

事務局だより

●第百五十四回猫養会例会（芭蕉忌）が開催されました

・昨年十月二十一日（水曜日）、江東区芭蕉記念館にて開催。五卓に分かれて芭蕉翁追善歌仙を興行しました。当日の作品は今号の8ページに掲載しています。ただし、当日予定されていた芭蕉忌正式俳諧は中止しました。

・令和三年一月に予定されていた猫養会初懐紙は、諸般の事情により中止しました。

●今後の行事予定

・令和三年四月に予定されていた亀戸天神藤祭例会と、亀戸天神社奉納正式俳諧を中止し、代替として四月二十三日（金曜日）に、第百五十五回例会を江東区芭蕉記念館にて開催します。当日の作品と、昨年の藤祭正式俳諧に予定されていた二十韻は、後日亀戸天神社に奉納します。

・令和三年六月二十七日（日曜日）に、新宿ワシントンホテル新館にて第三十一回猫養同人会を開催します。

・令和三年七月二十一日（水曜日）、第百五十六回猫養会例会（総会）を江東区芭蕉記念館にて開催します。

●リモート（Zoom）連句会の案内

・猫養会として、リモート会議システムZoomのアカウントを取得し、二月七日に第一回のリモート連句会を開催しました。四座に分かれて二十韻四巻を巻きました。当日の作品は、今号の10ページに収録しています。当面隔月開催とし、第二回は四月十一

日（日曜日）午後一時から四時まで（延長可）の予定です。インターネットにつながったパソコンまたはスマートフォンで参加できます。参加ご希望の会員は、平林香織宛にメールでお申し込み下さい。



全体集合画面

●猫養会公式サイト内『季刊連句』ファイル更新
・猫養会公式サイト内「資料庫」に収録されている『季刊連句』全巻のpdfファイルを、より鮮明なものに更新しました。

●猫養作品集第二十五巻発刊予定

・猫養作品集第二十五巻を七月に発刊予定で、現在編集作業が進んでいます。

●猫養基金にご協力ありがとうございます

・平林柳下様 令和二年四月 四千円
・五郎丸照子様 令和二年十月 四千円
・南雲玉江様 令和二年十月 二千円
・匿名 令和二年十二月 一万円

基金口座 みずほ銀行新宿新都心支店

猫養基金 普通預金 3376045

●新会員

・竹中禎子（長野県） 令和二年九月入会
・山中たけを（東京都） 令和三年一月入会
・岩田蛸舎（東京都） 令和三年一月入会
・篠はらつば（長野県） 令和三年二月入会
・篠原輪菊（長野県） 令和三年二月入会

●会員の転居

・竹中 壘 千葉県から長野県へ転居

●会員の番号変更

・瀧村小奈生↓宮川尚子に変更
・小原全然↓小原濤声に変更

●会員のご逝去

・爽楽庵宗匠、倉本路子様が、今年一月二十四日に逝去されました。謹んでご冥福を祈ります。

●各種募吟にふるって応募下さい

・第三十六回国民文化祭わかやま2021連句大会
・作品募集形式・二十韻（脇起、独吟は不可）
・応募締切・五月十四日（当日消印有効）
・詳細は日本連句協会公式サイトでご確認下さい。

●『猫養通信』バックナンバー

・猫養会公式サイト《<http://www.neko-mino.org>》
ですべて閲覧、ダウンロードできます。

季刊

『猫養通信』第百十四号

令和三年四月五日発行

発行人

猫養会 青木秀樹

〒182-0003

東京都調布市若葉町2-21-16

編集人

鈴木了斎

編集委員

奥野美友紀・佐々木有子・鈴木千恵子・
武井雅子・平林香織・御園魚彦
（五十音順）

印刷所

印刷クリエート株式会社